

一般教育と私

岡 晋 平

高松に来て約一年、その少ない経験をもとに一般教育についての雑感を述べてみたい。

現在一年生に限って言えば、農学部の一一般教育と教育学部数学科の専門教育を担当している。両者を教えていて最近奇妙なことに気がついた。講義の流れに対して、農学部の学生の方が反応が敏感に思えるのである。むしろ数学科の学生の方が鈍感に感じる。だから前者を教えた後は、その反応をもとに講義の良し悪しをすぐ反省できるのに、後者に対してはどうもそれが判然としない。これは想像するに、彼らの学問に対する気持ちの持ち方に違いがあるのではないか？ 専門の学生には、教員免許状のこともあって、講義を聴きたいから聴くといった学問本来の自由さと気軽さが欠如しているように思える。一方、農学部の学生の方は、4年間数学と付き合うわけでもないから気軽なものである。ほどよくリラックスし、肩の力も抜けている。この気軽さが数学を理解するうえで不可欠なのであるが、そのための環境が専門数学ではなく一般数学の方に準備されているとは皮肉なことである。

さて一般数学では、数学史に近い内容を教えている。つまり著名な数学者を適当に選び、その業績と現代数学に及ぼす影響をトピックとして毎時間紹介する形式を選んだ。このような形にしたのは、まだこちらに来たばかりで、農学部の学生の理解力が

どの程度なのかよくわからなかつたからである。一旦分野を決めて論理的に統一された講義を始めると、学生の理解力とのギャップを感じてもそれを埋めるのは容易なことではない。それにもうひとつ、現代数学に対する不満もあった。整理され抽象化された体系が前面に押し出され、数学本来の生臭さが消し去られる——現代数学が持つこの欠点をわざわざ彼らの前に露呈する必要はないと思ったのである。もっとも数学に真剣に取り組む者なら、与えられた現代数学という骨格標本に（ちょうど古生物学者が行なう様に）肉付けをし、その生物の全容を復元することも可能であろうが、それには相当の数学的訓練と素養が必要とされる。その努力は数学を専攻する学生にこそ求めるべきものだと思う。

一般数学を考える時、私には常に“数学の日常化”という言葉が頭に浮かぶ。本格的に現代数学を学ぶ学生の習性として、彼らはそれを引き出しの奥深くしまいこもうとする傾向がある。そしてそれは彼らの日常とは何の関係もない“something special”に妥容してしまう。しかし数学は本来（それが数学者の手許にある限り）特別なものではなく日常的なものだったはずである。私は一般教育という場で、この生の数学を気軽な形で学生に提供していきたいと思う。彼らがこの講義からひとつでもヒントを得て、それを友人との会話の中に生かしてくれれば私は幸せである。